

白百合女子大学図書館蔵

荒木田麗女『麗女独吟千句』の翻刻

雲 岡 梓

本稿は白百合女子大学図書館蔵『麗女独吟千句』の翻刻である。著者は荒木田麗女。明和九（一七七二）年七月に成立した、麗女の独吟連歌集である。

麗女は歴史物語の分野において有名であるが、西山宗因の曾孫である西山昌林や、里村昌琢の子孫である里村昌迪に入門して連歌を学び、京阪を中心として様々な連歌の会に出席する等、連歌との関わりも深かった。

また途絶えていた豊宮崎文庫（現在の神宮文庫）の連歌会を再興し、自宅でも月次連歌会を開く等の活動も行っていた。そして晩年には里村昌逸からも力量を認められ、田舎宗匠になるよう勧められた。

そこで麗女の連歌という新たな一面を示す資料として本書を翻刻し、紹介する。

*

本稿の執筆にあたり、『麗女独吟千句』の翻刻及び掲載を許可して下さいました白百合女子大学図書館に、深く御礼申し上げます。

【書誌】

〔底本〕 白百合女子大学図書館蔵本 一巻一冊。

〔表紙〕 黄土色格子模様。二二・九×一六・一（cm）。

〔外題〕 「麗女独吟千句 麗女自筆稿」題簽左肩、「麗女独吟」題簽右肩（後補）

〔内題〕 「千句連哥第一子日 隆女独吟」

〔所蔵者整理名〕 「麗女独吟千句」

〔体裁〕 袋綴。

〔用紙〕 楮紙。

〔丁数〕 六〇丁（遊紙前一丁、後一丁を含む）

〔行数〕 一〇行。

〔構成〕 麗女独吟千句（本文五十五丁）跋文（三丁）遊

紙（前後一丁）

〔印記〕 内題下に「紫山」の丸印。跋文文末に「荒木田氏」の角印。「麗女」の角印。

〔備考〕 荒木田麗女自筆と思われる。同筆頭注あり。小

津久足旧蔵。

【凡例】

- (1) 漢字の旧字体は、適宜現行の字体に改めた。
- (2) 一部の漢字表記や底本の仮名遣はそのまま残した。
- (3) 本文には、読み易くするために適宜句読点を補った。
- (4) 本文には、必要に応じて濁点を付した。
- (5) 「、」「く」「ゝ」などの反復記号は底本のままとした。また、反復記号にも必要に応じて濁点を付した。
- (6) 頭注は原態の通りに示した。
- (7) 各折の表裏を示す符号は、底本の表記に従った。
- (8) 資料の摩滅・虫損等により判読し難い場合は、その字数を推して□で示した。
- (9) 底本の振り仮名は、原態のまま残した。

千句連哥第一子日

隆女独吟

何鳥

夫木

子日にはのべならね共住吉の
まつの際にぞ祈るばかりぞ

同

玉帯初子の松に取そへて
君をぞ祝ふ賤の小屋まで

野辺はさぞ此松陰も初子の日

取玉箒春を得る宿

雪も今賤が垣内ひまそひて

鋤渡すべき小田の末く

沢水の烟さながら朝霞

竹のしげみは風もなびかず

出やらぬ月待谷のしめやかに

山の何所ぞ遠き鹿の音

ウ

分行は松原曇れる霧の中

雨をかけつ、折はぬれ柴

夫
時雨する山のぬれ柴こりにとや
まだ夜をこめて賤がむれたつ

万

家にあれば妹が手巻ん草枕
旅に臥たる此旅人あはれ

狭衣也

旅人のかりねする野、暮寒み

妹が手巻し家路恋しも

見初つる飛鳥井の陰忘れかね

夫

たえらくに影をばみせて飛鳥井の
水草隠れに飛蜚かな

伊勢物語 後撰

行蜚雲の上迄ぬべくは
秋風吹と雁に告こそ

涙さそひて蜚乱れつ

まだき待秋を告来せ天つ雁

端居夏なき月のたそがれ

雲帰るそなたに高く峯晴て

それとそびへし塔は奥山

幽かなり絶ず行ふ鈴の声

ほそき流にす、ぐ阿加の具

摘入て袖も匂へる花簪筥

夫

春くればかたみぬき入て賤の女が
垣ねのこなをつまぬ日ぞなき

小菜生添し野を分る春

同

老らくの腰二重なるみを持って
卯杖をつきて若菜をぞつむ

二

卯杖引よるばふ姿かたくなに

くるしさいとふ末の一坂

躬恒家集

歎のみ大江の山はちかけれど
今一坂をこえぞかねつる

初風吹立方や大江山

堀川□下

思ふ事大江の山に世中を
いかにせましと三声鳴也

叫ぶましらの侘る露霜

月にさへ弥増はうき物思ひ

新古

見し人は十符の浦風音せぬに
つれなくすめる秋の夜の月

夢も七符の淋しすがこも

六百番

更にけり頼めぬ鐘も音つれて
七符淋しき十符のすがこも

歎きつ、独ねよとの鐘鳴て

夫

古郷は遠山鳥のおのへより
霜をくかねの長さよの空

声せぬ思ひさぞな鷓

新千

はし鷹の野守の鏡影をみて
遠山鳥も音をや鳴らん

箸鷹はそれて影さへ水鏡

野中の道や糞よこぎる

夫

たれもみよ是は雲の空ならん
ちりくる花は雨やまじりし

風先にあへず岡辺の花散て

夫

岩はすら行とほるべき丈夫も
恋てふことは後のくひあり

二ウ

行とをる道も絶たる岩が根に

恋さめいとゞ悔ん丈夫

夫

丈夫のうつし心も我はなし
よるひる分ず恋し渡れば

化なるはうつし心も乱れそめ

かゝる涙の袖忍ぶ懼

夫

春日野の忍ぶもぢずり秋萩の
花のみだれもかぎりしられず

咲萩は誰を思ひのつまならん

同

すがる鳴化の大野を来て見れば
今ぞ萩原錦をりかく

すがる鳴野、菴の夕暮

月のもる壁の透間のきりくす

老の枕に侘る小夜風

友と見る松もいつしか物古て

今朝ぞ尾上は雪の高砂

波遠く漕出し室の泊船

入ぬる磯は満る汐時

霧さにはさはぐ芦原暮初て

鷺の糞毛やそぼつ急雨

露分て田長の帰る袖涼し

かこふ竹葉の打戦ぐ陰

芥火の烟は軒に立消て

月の外山は虹ぞ収まる

染渡す紅葉や木の間照すらん

時雨も杉の奥深き秋

四手懸る宮居仄かに霧こめて

朝清めする宜欄がしはぶき

氷たゞ結ぶよるべの水ならし

頼む葵も枯くの中

玉簾隔てや果ん憂契

此門よきし小車の音

法の師に送れる哥の心ばへ

聞きに入ん道思ふ人

三ウ
ともしずか端山が末の五月雨に

木隠れあへぬ夏虫のかけ

八重葎さはらで澄る月の暮

夫

打時雨虹立つ秋の下もみち
染渡したるかづらきの山

続後拾

八重葎茂みが下にむすぶてふ
臙のし水夏もしられず

秋も臙の清水汲ばや

大原や露も古にし里に来て

新古

世中を背きにとてはこしか共
なをうきことは大原の里

うきこと堪ず世を背く袖

源氏

立ちそひて消やしましうき事を
思ひみだる、けぶりくらべに

むせぶ其烟くらべん我思ひ

待夜涙にしめる薫

忘られて恨も解ぬ花の紐

鶯だにもよそに行声

子規名乗霞まぬ高間山

日はほがらかに明過る里

人とよむ市場は雪の晴けらし

こりて年木や運ぶ跡先

もしほ

東路のひらのなはての馬さくり
うたての月のやどりそゞろや

名

なづめるをしゐても引は馬さくり

子らが真袖に移る月影

合せぬる艸の色く花見へて

秀し香さへことに白菊

唐哥も今日九重に聞へあげ

愛る乙女の舞のよそほひ

神わざや春毎絶ぬ三笠山

霞て深し柿さす陰

桜咲梢は霜も跡なくて

荒みし風のぬるむ江の北

浦波の月に今はと帰る雁

急ぐ船路の末は明ぼの

心さへとまらぬ思ひうかれ妻

頼む契もかりの舎よ

ウ

蓬生の陰等閑に問捨て

夏はや風の過る萩の葉

夕立の露は砌に残るらし

求食せし鶴飛かける跡

濱伝ひ蟹の呼声ほこりかに

須磨の浦半や春日かゞよふ

関の戸もともにひらけし花の時

治れる世もしるき長閑けさ

第二鶯

何山

黄鳥や春面白き笛の声

風も匂ひて散かば桜

波かけて岸の柳や乱るらん

霞流れし河水のうへ

させばさす月をしるべの釣小船

雫露けし岩觸る袖

瓜木取衣も秋の色くくに

朝まだきより行岨伝ひ

ウ

乗駒も梯遠くうち渡し

嵐の松の音絶む程

新古

世中をおしむまでこそかたからめ
かりのやどりをおしむ君かな

新六

唐竹の笛にまくてふ權桜
春おもしろく風ぞふきける

夫

賤の女が爪木取にと朝起て
色々衣袖まくりしつ

積るより雪を砌のしめやかに

二

出遊ぶ真砂長閑けき垂髪声

物忌過て簾巻らし

夫
うなひごが垣ねにいほふを社も
思ふ事だにならば頼まん

道のほとりに祝ふ小社

契つる日数たがはで問も来つ

同

道のべの木の下陰の辻やしろ
誰なをざりの麻手向らん

等閑に取大麻も手向にて

源氏水串卷

明石に行ぞ文使なる

化し思ひに乞褔は何

同
明石

かりねせし岡辺の舎忍ばししみ

後拾

奥山にたがりて落る滝つせの
玉ちる斗物なおもひそ

忘れし袖に玉ちる露涙

鹿や思ひを付る夜な〜

形見の緒琴音さへ冷し

源氏

藤衣露けき秋の山人は
鹿の鳴音にねをぞ添つる

月にさへ涙重ぬる藤衣

源氏蓬生

蓬生の月に覚ゆるその昔

なべてうき世の秋や侘人

そなれて軒の松高きかけ

薄らぎて風もたまらぬ垣柴に

菴近き山にあなかま蟬の声

夫

旅のいほは嵐にさはぐ横時雨
柴のかこひにとまらざりけり

横さま雨の宿を打音

枕の瀧や目をさます暮

船とむる湊にさはぐ花の波

筏士の休所は岩だゝみ

磯間によるや春の色貝

新六

村雨に野への笹目を分行は
重ねて蓑をきる心地する

かづきし蓑は小雨過す間
分迷ふ冬野、篠目風かけて

同

ますらをがみのにさくと沢に生る
さ、めかるにも袖はぬれける

黄昏寒み帰る益雄

夫

夏川のせゝに鮎釣ますらをも
我うきかけはみづからぞ思ふ

ウ
逢期なきみづからぞ憂恋の道

源氏

袖ぬる、恋路とかつは知ながら
下立田子のみづからぞうき

袖のみぬらしえにし悔しき

山の井の陰見る水は汲絶て

月まで早苗苺急ぐ比

時しりて空にも雁の鳴渡り

新千

我がどの早田雁がねいつしかと
雲ゐに渡る友よばふ也

秋風辞

秋風立てなびく白雲

露ながら末野、尾花ちりぐに

荒るも哀年を古跡

うつは蔵開卷

残れるは翁の守る蔵にして

貧しき民ぞ御調怠る

辛き世を海辺は通ふ船もなし

新古

流木と立白浪とやく塩と
いづれかからきわたつみの底

塩焼浦によるは流木

花にたゞ鄙の別もなぐさみて

日も長旅は天ぞかる道

夫

年越の都の空の長旅に
つばさたれてや帰る雁がね

三

分帰る雁の翅も打かすみ

曙かけて望む高樓

色まがふ雪より上の峯の月

源

峯の雪汀の水ふみわけて
君にぞ迷ふ道はまよはず

泪水れる汀行ほど

妹がりは川風早き此ゆふべ

夫

唐衣立田の山の萩よりも
妹をぞ君は珍しとみん

まどふ思ひの末や立田路

神鳴の陣

鳴神の音も轟く宮の中

大和物がたり

命さへはかなき契いかゝせん

伊勢物語

人をゐて行末も聞き夜

源氏桐壺

妬みおひしは憂宮仕

同

忍ぶ身の思ひ果なき武蔵野に

鴨長明の事

すゝまざる位ひたすら打歎き

尋ねて摘は枯ぬ紫

増鏡あきさだ大納言の事

かしらおろして入山の奥

霜を経し色なつかしき冬の菊

山家集

山ふかみけ近き鳥の声はせて
もの恐ろしき鼻の声
泉鳴松桂枝 狐藏蘭菊叢

泉の声を友なる住所

古今 つくしにて

古里はみしこともあらず斧のえの
朽し所ぞ恋しかりける

碁の楽しみに朽たす斧の柄

夫

花をみる道のほとりの古狐
かりの色にや人迷ふらん

絶ず狐のかよふ木の下

源氏玉葛

したふ余波もさぞな兄弟

拾玉

あたらしや夷が千嶋の春の花
ながむる色もなくてちるらん

夷やこさふく霞む大空

同

あやなきはなつかぬ猫の心にて

もしほ

こさふかば曇りやせまし陸奥の
えぞには見せじ秋の夜の月

出るより月もや真弓春の暮

後拾 道雅

榊葉やゆふしで懸しそのかみに
をしかへしてもにたる比かな

木綿かけし往昔床し今日の月

夫

八十嶋の千嶋のえぞがたつか弓
心づよさは君にまさらじ

近衛外の衛の立つどふ袖

誓あやまつ恨身に入

徒に露古果る橋ばしら

五月雨幾日晴ぬ河影

里人のとらん早苗もふし立ぬ

此ごろしのにきく子規

山辺には柚木引声絶さらじ

雲も分れて朝日さす峯

をしなべて花に咲梅白妙に

しりへの園は雪も残らず

野は春とみづわぐむ身も菴を出て

たはれ合しは何わらはごと

打たれて乱る、髪は肩過ぬ

恥らふ袖の月やまばゆき

伊勢物語

万

あぢきなし何のまがごと今更に
わらはごとする老人にして

源

うき身世にやがて消なば尋ねても
艸の原をばとはじとやする

ウ

捨かねて頼むは中の扇かも

露のよすがに問ふ艸の原

山里は霜のふりはに冬の来て

吹木枯や淋しさのはて

檜柴の陰夕こりの雲深み

鳥は時声ぞしづまる

よる波も渚に立る鶴ひとり

引網人は帰り去跡

霞さへ隔てぬ花の色はへて

八重款冬や植し垣内

源

こてふたもさへはれなまし心ありて
八重山吹を隔てざりせば

第三桜

糸何

咲峯や余所目は八雲八重桜

めぐる日速き奥の山里

水車春の田川に音信て

岩間くは氷消けり

朝風に駒のいはへる旅の道

末も広野は霧晴る跡

松原やそなたも月に秋の色

桮の尾花うち靡く比

ウ

分出る狩場しみ、に露散て

鴉は雨におもきおほひ羽

拾玉

一夜みし人の情は立かへり
心にとどるあふはかの里

新統

隠覚法師の事

源氏橋姫

堀川百

うばそくは行ひすらし真木のたう
荒山中にまぶしさしつ、

万

すべらぎは神にてませば楨のたう
あら山中に海をなすかも

立すがる市に残るぞ風なる

独思ひにうかれぬる暮

頼まぬも待て傀儡のぞれ歩き

情かはさん里は青墓

かりそめの舎ながらも見捨かね

稚きを世のほだしなる程

優婆塞は心に西や願ふらむ

入さの月にむかふ荒山

風かけてや、浅くなる霧の海

船かとはかり一葉ちる陰

よる波の間にく誘ふ花はおし

暮なん春をとふ志賀の里

二

鳴声も老の鶯あはれにて

分る野守ぞ道によろぼう

雪積る竹の鎖は明侘ぬ

日影もしらず冬籠る山

余所にたゞ豊の明を思ひやり

古き世かくる文はなつかし

忘ぬは三年の後の契にて

鶯は秋なき新枕せり

月更て池しづかなる水の音

芦のほのかに結ぶ露霜

夫

むらく／＼にさらせる布と見へるは
たま江の芦の花にぞ有ける

夫

むかつおの畑のかこひの卯花や
しづのさらせる手作りの布

鷹三百首

秋の野の尾花の□□光在て
はしる兔を鷹や追らん

鎌倉石大臣集

武士の矢なみつくろふ小手の上に
あられたばしるなすの篠原

ウ

さらす其布むらく／＼に引はへて

畑のかこひの陰薄霞

兔のみ通ふ艸村萌初つ

そりぬる行衛いづこ朝鷹

武士の小手に霰の玉散て

仇をおさへの関のかさ音

侘て唯住は筑紫の館なれや

跡はる御けし身をも離たず

ねもころにとふ友だちの心ざし

須磨のうらみに沈む左遷

鳴神の跡なき月に夢覚て

源氏幻

みや人は豊の明にいそぐ今日
ひかげもしらでくもりつる哉

同乙女

乙女子も上かへぬらし天つそで
古き世の友よはひへぬれば

伊勢物語

千五百

三年までつがひなく共鶯鳥の
うきねの床に新枕すな

仇守るは筑紫の枕詞也

菅神の御事

伊勢物語

是や此天の羽衣むべしこそ
君が御けしと奉りけれ

源氏須磨

同

古今

天の原ふみとゞろかし鳴神も
思ふ中をばさくるものかは

思ふ中には秋もみじか夜

しるごとくも尽せて露の起別れ

やはらるゝ身ぞうき恋の道

例ならぬ此比小野、住所

行ふ程や横川出けり

咲花の山踏はたゞ法のため

浄土参りの遊び長閑けし

三

津の国の名には隠れぬ春日影

哥詠こそこゝろ有人

君が行方に白波立ぬらし

深き思ひよ猿沢の池

狭衣

うつほ

月にうく涙菖蒲の露添て

扇を笛にならす手すさび

端居してそゞろきぬるは若きどち

おろしもあらず酔る酒瓶

今日いはふ七夜に粥もすゝむらし

砌の雪や鶴の毛衣

枝かはす桜にうづむ松の声

かの岡照す色夕つゝじ

佐保姫も爰にたはれん春の山

雨の跡なき風の下道

ウ

待出し月に船さす江の上

夫

此寺の浄土参りの遊びこそ
浅き物から誠なりけり

拾遺

心あらん人に見せばやつの国の
難波わたりの春のけしきを

古

風吹ばおきつ白波たつた山
よはにや君がひとり越らん

大和物語

夫木

秋の夜のふけるの浦に舟出して
月にや蟹のすゞぎ釣らん

浦半の波に鱸釣時

同

秋風に鱸の鱗思ひ出て
行き
いにけん人の心をぞしる

故郷の秋をや誰も慕ふらむ

唐土遠く使せし人

うつほとしかけ

作ぬる琴は妙なる声にして

和琴の事

忘れじ常に馴しつき弓

千載

八年迄手なしたりしあづさ弓
かへるをみるにねぞなかけける

うしと世を侘て仕も返すらし

陶淵明の事

荒るを思ふ其三のみち

源氏蓬生

蓬生の陰たどりつゝ分入て

同卷

年をへて待験なき我宿を
花のたよりに過ぬばかりか

花をよすがによきずとふ宿

霞む音は恋妻なれや郭公

夫

身は隠れ声は音なふ天彦を
尋ぬるほどに夏ぞくれぬる

天彦いかに身を忍ぶ春

万

つくはねを我ゆけりせば時鳥
やまびことよめ鳴ましやそれ

風戦ぐ余波曇りし筑波山

おてもこのものは時雨ひまなき

万

ふたがみのおてもこのもに網さして
あがまつたかをいめにつけてぞ

名

網さすはとりく渡る道の隈

贅のいそぎに船おろす秋

夫

手向べき神の贅ぞとことよせて
御前の川原やなうちてけり

月になる神の御前の浜清み

住江殿の夕べ身に入

新葉

住吉の御前の沖のしほあひに
うかび出たる淡路しま山

里そこと近き碓の槌の音

杵哥止つる呉竹の輿

治れる世に山人も出果て

国栖も都の春を待比

吉野、国栖人なり

国栖等がわかな摘らんしめの野の
しばく君を思ふころかな

標の野に摘し若菜も冬枯つ

朝霜払ふ袖も白妙

ねくたれの姿見送る別路に

まだき鳴音をかこつくたかけ

忍ぶにも宿直やつれの恥かしな

果てさやかにうち日さす宮

ウ

注連はふるあたりに花の香は満て

精進の場にふるゝ東風かぜ

千代祈る春とて舒る経の巻

鳥すら唱ふ其仏法僧

とことばに心すむこそ太山なれ

入て葉や□し谷陰

夫

世の為に祈るしるしの始かな
いもゐの庭の春のひかりを

夫

鳥の音も三の御法をきかす也
み山の庵の明がたの夢

朗詠

丹竈道成仙室静也

古今長哥

是を思へば古への葉けがせる
けた物の雲にほえけん心地して

獣の雲に吠ふるは恐しみ

檜原が末に風は烈しき

第四蟬

何川

蟬の音や岩にせかれぬ瀧の水

池辺涼しくならず松陰

露と散浮藻の花に風越て

苦屋のめぐり小雨過けり

外面田やはか／＼月の移るらむ

大空渡る雁は一行

明果て野筋分る、秋の雲

さそひ出しやとらむ柴人

夫
色々の花ゆへ野べに立出し
心までこそ霜がれにけれ

ウ
色／＼の木の葉衣に冬見へて

森は嵐に時雨しば／＼

源氏帚木指食女の事

同夕顔の事

つまづくは駒もすさめぬ道の末

いられごゝろよ来んを待暮

くゆるこそ思ひ臥籠の下烟

這隠れしはいかにさうじみ

撫子の行衛もしらぬ秋はうし

野分の跡や荒る朝庭

さら／＼と露の籬の月の影

化雲晴て近き山の端

悟得る心におもふ身のよはひ

腰のべしより捨し塵の世

雪と見る花の九重余所にして

夫
百敷や照日の前に取鉢の
身を立かぬる花の下陰

玉鉾立ん御階霞めり

二

春にまづひらけし国や淡路嶋

神代の風を伝ふことの葉

妹と背はあなにへやとも打むかひ

涙の瀧ぞ山の中行

塵積る枕は月も冷じみ

なやみ程ふる床の露けさ

送るこそ秋も梢の木実なれ

詣て奈良の御寺とふ時

ことさらに作りみがきし盧遮那仏

迦陵頻伽の声よ糸竹

折に逢汀の蓮咲出て

二神の御事

拾

おほなむちすくなみ神のつくれりし
いもせの山を見るぞうれしき

金

仕つるこのみの程をかぞふれば
哀こそへになりにけるかな

栄花物語

拾玉

是体如は東大寺なるるしやな仏
げにあかゝねの大ほとけ哉

夫

暁の蓮のうてないろくゝに
しみ増るなり糸竹の声

万

蓮葉はかくこそあれもおきまろが
家なる物は芋のはにあらし

為尹千首

明ぬより手向にとりつあさ曇
うねの、いもの露も残らず

夫

恋侘ぬつれなき人にあふみちの
しるべにかよへしのゝをふぎき

名にしをははや打出よ近江路の
しの、小ふゞき忍びくゝに

源氏花宴

金

莞ありける物を君にまた
しく物なしと思ひけるかな

是は大式といへる女房の後頼と
こうきでんのほそ殿にて物いひ
ける時の哥也猶集に妻

夏なき露になびく芋の葉

うねの野を朝立来るは旅の袖

手向しつ、も分る近江路

憂恋のしるべはしの、小雪吹

忍びくゝの契身に入

われて見し月のほそ殿忘れかね

長き夜堪つ敷艶

大徳の行ふけはひ功付て

肩のまよひは此苔衣

薪取水汲てすむ洞の中

乗て通へる鶴の鳴山

爰にしも卜る春秋とことほに

四町豊けき陰花紅葉

植竹や田影のさかい分つらん

賤が行かふ道は新治

里人のあがめて祭る辻社

麻切捨る夏祓せり

天の河星も逢瀬の秋待て

鶉鳴空の月薄き影

目も霧て涙の晴ぬ物思ひ

さはり告こす露の玉章

源空蟬

南風の政事

夫
山本の雲の下帯長き夜に
幾結びして雁もきぬらん

かこつこそ胸もふたがる方違

あやにくにしも恋る他妻

形見てふ帯は宿世も長からで

詠る雲も引捨る暮

咲陰は虹ほのかなり山桜

楼は幾春ふりし梁

軒近く燕かはらで飛わたり

鳴ぞ水になれて眠れる

さし遣るはしばし硯のうみけらし

つらさにこりぬおもひする暮

垣間見は床しき月の姿にて

新六

更ぬるか道のちまたに御禊
して麻切り捨る村の里人

夫

七夕の天の河原に恋せじと
秋を迎ふる御禊すらしも

万

久方の天の川原にぬゑとりの
うらひなおかつくるしきまでに

夫

雨に又水そひぬ也夜もすがら
物思ふやどに鶴の声しつ

伊物

むばらからたち分よりし陰

うつほに
石つくりの薬仰を云あり

うらゝに法の筵のべにき

置そはる露霜冷る畔伝ひ

彼岸の事

名

西をさす日影も春のなかばにて

山風いたみ神鳥鳴めり

霞む船路の末や唐土

一村は人気も稀に物さびて

堀後

沖波も遠き博多の夕□に

竈のけぶり絶くゝの色

唐人はしがのをしまに舟出して
はかたの沖に時つくる也

恵有時と御調もゆるすらし

後拾詞書に
つくしより上らんとてはかたに
まかりけるに館の菊のおもしろく
侍りけるをみて

菊にこゝろの移る此宿

いさめの鼓かけ捨し程

霜がれの翁草とは名のれ共
をみなへしにはなをなびきけり

なまめくは月の砌の女郎花

万長哥

とゝのふる鼓の声はいかつちの
声と聞まで吹なせる小角の音も未聞て

軍今止て小角も吹すさび

夫木
をのが住春日の野べの女郎花
しらでやつまをしかも恋らん

思ひきほへる棹鹿の声

解くみ髪を夷ごゝろよ

大和
今こそ餘所に声をのみきけ

慕ふにも今は余所なる中の秋

伊物

物いひのさがなさ侘る語らひに

楊貴妃の事也

蓬が鳴に帰り住人

頼政家

もらすなよ局ならびの下口は
物いひあしき宮こそ見れ

局ならびやみやびかはせり

うがやふきはせすの御事

取あへぬ皇子の産屋珍しな

うつほ物語

花衣きて尋ねつる石つくり

聖徳太子の御事

其名幾代に残る厩戸

新千
絶せじな後のさがの、未遠く
富の小川の流あまたに

流れては富の小川の末広み

後の嵯峨野、道続く末

雪はまだ積りもやらぬ朝朗

夫

冬の朝衛士の煙を立る屋の
あたりはからき九重の雪

外の衛に衛士の焼火かゞよふ

ウ

緑添御垣の竹のうち靡き

清まはりする日数いつまで

ことよせてあふみ遁る、注連の内

源葵

心がわりのしるさ人伝

きかばやな人づてならぬ言のはを
みとのまくはひまでも思はず

忍ばる、身渡の幕拜跡絶て

難面さ侘る丸寝幾夜ぞ

花錦春さへ紐の解がたみ

夫

み吉野、山井の氷柱結べばや
花の下紐おそくとくらん

山井は去年の氷残れる

第五扇

三字中略

白妙や夏にあふぎを袖の色

端居して待暮毎の月

雨雲の余所にや過ん郭公

木隠れ分る山路はるけし

尋ね入花は尾越に薫るらん

泊狩場に渡る朝東風

移る日に野沢の氷打解て

苗代近くよするさゞ波

夕去ず水葱コナギの下ミヅになく蛙

鳴の臥所は此道の隈

同

哀さは萩吹風のをとのみか
有明の月に鳴も鳴也

哀そふ霧の籬の月の色

袖の別は露の暁

野、宮の秋や思ひの果ならむ

松に残るは淋し琴の音

夏かけて忍ぶは有し藤の宴

雨もふりたる廊のたそがれ

人は皆あかる、寺のしめやかに

狸としるゝ鼓うつ音

物すごく雲より奥の山嵐

入て荒男が木をたふす道

消ん日もかた樞の陰雪深み

夫

人すまで鐘も音せぬ古寺に
たぬきのみこそ鼓打けれ

万

志加の山いかでな切そあら男らが
よすがの山と見つ、しのばん

夫

氷解し山の雪をせきかけて
苗代水にさゞ浪ぞたつ

夫
行てはや衣にすらん苗代の
こなぎ花さく時もさぬらし

同

春雨のふるの山田を来てみれば
鳴のふしどに蛙なくなり

冴る井の水汲まよふ春

夫

武士の八十の妹らがくみ迷ふ
寺井の上のかたかしの花

二

菴より這出の小田は打霞み

土壁近くよる蝸牛

夫

牛の子にふまるな庭の蝸牛
角あればとて身をば頼みそ

牛の子は村のあはひに引捨て

艸くらべ猶あかぬ總角

新六

うなひ子が打たれ髪を振下て
向ひつぶての袖かざす也

月に唯向磔は止けらし

夕べ新に涼し山本

薄霧の絶間に立は鷲にして

夫

鮎の臥せゞの岩間に居る鷲の
みの毛乱る、加茂の川かせ

川瀬に魚のうき沈む影

夫

あみだぶといふにも魚はすくはれぬ
こやたすくとはたとひなるらん

世をすくふ為と唱ふるあみだ仏に

空也上人帝門に哥を出たる事也

聖はこゝろすむ市の中

玄資僧都の御事

万

此比の我恋力たがはずは
都に出てうたへまうさん

六帖

恋草を力車に七車
積ても余る我心哉

愁ある人のうたへの憐まれ

休む日もなし憂恋力

つみあまる涙の数は七車

行てはたゞに帰る中道

伊物

ウ

笛竹の忍ぶ夜声はかすかにて

とふに昔や思ふ一條

今日月にみるはさやけき筆の跡

過る風間に鳴きりくす

初雁は雲井に遠く名乗して

稲葉荊干道のかたぐ

山下に落るをうくる水許

夫

蜚雲の雁に何といひて
かべの中より声合すらん

新六

民の戸に秋取する稲ばかり
年ある御代をかけて知らし

夫

あし引の山にかけたる水許
かたさがりにも落る滝かな

外面に絶ず瀧の音せり

鹽や巖の零侘つらむ

しみ行霜にしらむ艸村

鐘聞てきぬゝ急ぐ此朝け

恥らふさまもしゝま嬾

咲花のゑまひたぐへん形人

飛火の烟添てかすめり

源末摘花

褒姒の古事

杜甫五言

国破山河在城春草木深

三

戦はたゆまで春も尽けらし

波立かはる船や防人

日照して風もなをりし浦伝ひ

摘ん入江に蓼ぞ色付

万

今替る新防人が舟出する
海原のうへに波なごさそね

夫

しのためて雀弓はるおのわらは
ひたいゑほしのほしげなる哉

露霜にひちて垂髪が袖まくり

雀弓をぞささびなる秋

月も漸額烏帽子のかたぶきて

宿直する夜の思ひ丑みつ

侘つゝも泪敷妙夢たえぬ

空も折しる時雨むらゝ

風かけて沖はなごろの高からじ

海馬をねらふ船帰る見ゆ

焼火こそ夷が岩屋のしるべなれ

初旅に今たどる陸奥

艸荒し塚は年経る跡ならむ

夫

我恋はあしかをねらふ夷舟の
よりみよらずみ波間をぞ行

実方の塚の事也

ウ

夫

塚の上に松と柏との生るまで
待と契し妹がかしこさ

朽ぬ契が生る松柏

逢期唯命つれなく待渡り

源若菜

語出つる夢は身に入

夫

己が身に霜置夢や見えつらん
つげの、鹿の諸声になく

哀なり夜深き野への鹿の声

同

関の戸のゆふ付鳥はつれなくて
鹿の音をくる足柄の山

鶏鳴禁月ほそき影

夫

ねのみ鳴宿の鶏聞なれて
君に仕へぬ年ぞへにける

仕へをも止て入ぬる菴の内

とはれぬ宿は雪ぞ閉つる

塵となる花の砌は拂はずよ

殿守の伴の御奴よそにして
はらはぬ庭に花ぞ散りしく

行春惜む伴の御奴

徒に外の衛の霞立馴て

靱原の佐五位なり

緋の衣の色かへぬほど

大和物語野大武の事

帰るさも遠く出にし討手使

家路恋しき夜半の吹物

名

まぶしさす夏山近き旅どころ

行ふ比と入し谷の戸

捨る身は熊の喰ふも厭はめや

いわけなきしも孝や思へる

袖も唯桜に染て舞遊び

おぼろけならず仰ぐ神わざ

宮人の録たまふ日も長櫃に

新参りとてことにかしづく

其かみや忍ぶ別の櫛の篭

源絵合

増かがみ

新参りには録の事

朝ひらき霞曇らぬ神の前

み空に春の光あまねき

夫

わきも子にかくと斗は告やらん
記念のがうか花咲にけり

誰が為に秋咲花の合歡ぞも

同

山ふかみいづよりねぶと名を替て
がうかの木には人はかからん

とはぬ太山の住家冷じ

一声を待に種時過つらむ

夫

垣ねには鴟のはやにえ立てけり
しでのたおさに忍びかねつゝ

夏にいとはや百舌鳥の贅ざし

ウ

艸茂る垣ほは風も隔て来て

田舎のわら屋みる目いぶせき

住付ぬ心ツカにわぶる国つかさ

音に鳴つるのよる吹飯湯

花愛て浦半に幾日船とゞめ

梅は真砂の雪白くし

新古

天つ風吹飯の浦にゐる鶴の
などが雲井に帰らざるべき

第六霧

朝何

山本は秋ある霧のゆふべ哉

もみぢぬ木、も朱のそほ船

松高き浦の沖洲に月晴て

波かと立る影も白鶴

藻屑かく道また雪や残るらむ

霞もはてず戦ぐ呉竹

春来ても野は深草の薄緑

伏見のかたや日はしづかなり

明過る里輪にあさる駒の声

運ぶ真柴にかろき川風

夫

旅にして物ぞ悲しき山もとの
朱のそほ舟沖にこぐみゆ

夫

むら鶴の舍れる宿とみる途に
松のみどりをうつむしら雪

夫

春の野にとめもあへぬ駒なれば
我と伏見の里や荒れぬる

ウ

岸伝ひ浮土ぬかる雨の後

鱗しぱくかけ水たまり

小車の跡は松の火かすかにて

忍ぶけはひはたが前渡

月の夜をまたぬ思ひのあやにくに

泪の衣ほさでうつ音

貧しさを侘て幾秋傭住

帰る時しる燕あはれむ

日数ふる船路はてなき海原に

いかに蛭子のあした、ぬ程

神垣に絶ずさ、げん花の麻

夫

雨過るたのきのさゝるの水たまり
有はつまじき世をや頼まん

同

小車のわだちの水のかれくゝに
ひれふる魚は我をよばふる

夫

憂人に泪の衣引かへし
やどすとかたれ袖の月影

夫

燕め哀にみけるためし哉
かはる契はならひなる世に

鳥居の藤の盛久しき

新千

立寄ば司くも心せよ
藤の鳥居の花の下かけ

二

霞まぬは司くよそほひに

朝拝

龍の御影や拝む九重

天願咫尺

玉階を初にのぼるは僧ならし

仏あふがん堂建し時

新古

あのかたら三みやく三ほだいの仏たち
我立袖に冥加あらせ給へ

冥加あれと世を祈する比えの山

千五百

君が代を我立袖に祈り置て
ひはら杉原色もかはらず

栄ふる色よ雪の松杉

狩衣うらめづら敷道なれや

うつほ

琴の音とめて逢は其人

源紅葉賀

立ぬる、身をしる雨は四阿屋に

同東屋

かりねの露のしげき葎生

ウ

冷る夜を侘て鳴こそ行鷄

月すめとてや野風烈しき

山の端もあらはに雲のたちろぎて

樗いつしか散し岡のべ

川添の道は夕立きほふらし

もしほ

うしほ吹鯨のいきとみゆるかな
おきに一村くもる夕だち

鯨よりぬととよむ濱人

荒ましき波漕分る船乗に

新六

友舟は筑紫も伊勢も漕あひの
同じ泊りにうきねをぞする

隔つおもひはその伊勢筑紫

吹風につてさへうのは空だのめ

軒の一木ぞまつしるしなき

君が植し花も化なる年きりに

杜甫
春日鶯鳴修竹裡
仙家犬吠白雲間

友鶯やぬししたふ声

犬は猶住家もりぬる春の暮

通ひし跡をのこす仙人

袖方もそことさだかに峯の月

立すがる音はうす霧の末

盤余野、萩の葉しのに露置て

折てかざすは兒手柏よ

祭とく過てひもろき分つらし

孔子の教オシヘの道あふぐ人

御陵や詣てとふはことごとくに

今年もはやく暮る都辺

衣くばり

饒別に衣扇など送ん事常也

枕草紙

送るこそ縫かさねつる花ごころも

祝ふ首途は春に扇ぞ

影おそき日に向ふ空思ひやり

忘るな契る月の東路

朝露の起て別はうかれ妻

酩し余波も情身に入

梅は今実を結ぬる陰に来て

夏山近く小湊鳥飛かふ

風渡る禁の里の暮涼し

古帷子やす、ぐ井の下

絶ず唯賤は田舎の歩きして

千載

袖がたに道やまがへる小男鹿の
妻とふ声のしげくも有哉

夫

雨そといはれのへの萩がえに
隙なく露のすがるなく也

同

いはれ野の萩が絶まのひまゝくに
この手柏の花咲にけり

同

我といはばこのて柏のおもてく
とくひもろきもむすば、れつ、

三

釋尊

荷前

あきなひ物や多き市の場

李夫人の事

写し絵に過來し恨立帰り

玉と見へ鏡とみへて秋の月
市に出たる影や分らん

玉と見へ鏡と冴る月の影

王昭君の事

命尽さぬなげきいつまで

夫

ます鏡光りをそふる雲の上に
ほしさへ渡る声聞ゆ也

神楽おもてのしらむ明方

陶朱公の事

名

取くゝのころをしるはたらちねに

源若菜

神人の手に取もたる榊葉に
ゆふかけそゆる深き夜の霜

住吉の松さへ霜に木綿かけて

さかし愚かも哥のさまへ

万

住吉の岸の松原遠つ神
我大君の行幸し所

行幸を千代のためしなる時

綿花に叢走の月はへて

後撰

此御幸千年かへでもみてしがな
かゝる山ぶし時にあふべく

山臥も今日春の日にあたるらし

玉の砌はきよき春風

夫

行ひにそゝぐ水こそほれぬれ
ちらす杖にて打たゞけども

行ふ谷の水ぬるむかけ

打靡く柳の糸も青やかに

同

小草摘古田のあぜの沢水に
若菜すゝぐと袖ぬらしけり

打叩く杖にぞわるゝ朝水

夫

御垣守やそのつゞきは今もかも
とものぞめきに若なつむらし

摘て根芹やあらふ浅沢

鶉のあるあくみの柳なばへして
めぐみにけりな春を忘れず

鶉の下居る川辺長閑けし

夫

御垣守やそのつゞきは今もかも
とものぞめきに若なつむらし

摘て根芹やあらふ浅沢

人帰る汀に船をさし捨て

万

御垣守やそのつゞきは今もかも
とものぞめきに若なつむらし

倡ひし友のぞめきの野遊に

夫

御垣守やそのつゞきは今もかも
とものぞめきに若なつむらし

独やおもひなぐさまぬ袖

妹が門行過ぎがてにひち笠の
雨もふらなん雨隠れせん

ふりはへてとふは忘れぬ門ならし

万

御垣守やそのつゞきは今もかも
とものぞめきに若なつむらし

独やおもひなぐさまぬ袖

夫

御垣守やそのつゞきは今もかも
とものぞめきに若なつむらし

独やおもひなぐさまぬ袖

榮花物語

いられがましき文のかずく

しばしなる別もうしと思ひわび

方違ふるは物忌のほど

参るべき御嶽にこゝろ急がれて

枕そばだつ暁のかね

ウ

明日はよも嵐のすさぶ宿の花

梅の匂ひのかよふ釣簾の間

鳴雁や霞を分て帰るらん

海士舟よせておる、湊江

波さはぐ浦は潮も汲絶つ

斎の精進跡はふりにき

夫
うしほ汲斎のいもゐ年ふりて
や、朽にけりおのゝ江のはし

夫
雲路行雁の羽風も匂ふらん
梅さく山の有明のそら

夫
ながきよの例にひかんすゝか川
こえて斎の渡會のしめ

渡會の注連は雪をもかけ添て

棚引雲も晴し明ぼの

第七月

夕何

月今夜ひとつ光や四方の海

波よる嶋輪霧晴る比

秋にせず蓮取く船さして

暑さ残らぬ声も烟

村雨の跡なき軒端かはらかに

釣簾卷袖もかろき下風

梅の香はかつく通ふ朝朗

霞分入関の杉むら

鳴帰る雁を山辺にき捨て

夫

郭公いつみ吉野の里なれて
田面の雁の跡したふらん

田中のすへに行子規
わら手くむ陰は夏の日かき曇り

六百番

をのづからなさげぞみゆるあらてくむ
賤がそとも夕がほのはな

秋なすびわさの額につけませて
よめにはくれじたなにをく共

山城の瓜や茄子をそのまゝに
手向申ぞ加茂川の水

枕草子
わたつ海に親をおし入て此君の
ばんするみるぞ哀なりける

出羽なるひらかのみ鷹立降り
親のためにはわしもとる也

万長歌
しぶ谷の二上山に鶯ぞ子うむと
いふ 下畧

同
紀路にてぞ妹にありといへ葛城の
二上山もいもこそ有けれ

妹に恋つゝ行や葛城

忍ぶ身は明はてぬ間と急がれて

かこつ隔ては愛中妻戸

夫
逢見ての後のつらさの中つま戸
おりども明ぬをとしだて哉

夫
風吹ば蓮のうきはに玉こえて
しまはの荷たをらまくおし

ウ
鳴帰る雁を山辺にき捨て

透影は花も霞の袖几帳

爰佐保姫の遊所よ

壬二
余所にみてもしほも汲ぬ佐保姫の
霞の袖にかゝるうらなみ

塩汲ぬうらゝに□し波の声

蟹は鮑やかづく磯かけ

蛤のより来る岩根行帰り

夫
山吹をかざしにさせば蛤も
井手の渡りの物とこそみれ

夏まであかずかざす款冬

同
山吹の本あらの花ぞ咲にける
秋まだ遠き萩のまがきに

本あらのかまだ咲かぬ垣内に

新古
古里の本荒の小萩咲しより

移らふ袖ぞ月の色めく

よなゝ庭に月ぞ移ふ

万
左夫流子は遊行女也

佐夫流子が思ひも長き夜もすがら

頼むる夢もはかなたはれぬ

千五百

我恋はみちのね流寛やらぬ
夢なりながら絶やはてなん

江の水に浮て流るや雲海驢ならむ

年中行事
我國の御調備へて年毎に
今もくだらの舟ぞたえせぬ

よらむ泊はいづこ大船

運び来る御調絶せぬ高麗百濟

豊かなる世に作るなみ蔵

葛も松にちとせの陰あへて

風もはこやの山卸なき

夫
春毎にはこやの山にさき草の
万代かけて殿作りせり
千五百
いく塵の山をいくへに重ねても
げに我國はうごきなき世に

ウ

幾塵の積りてかゝる峯の雲

まよはで心ふかくそめがみ

新六
心をばよしなき色にそめがみの
うたてはらはでちりつもるらん
夫
錦木にかきそへてこそ言の葉も
思ひそめつる色はみゆらめ

かきやるは文をしるべの恋の道

色に出るや立る錦木

秋の野、盛を架に卜結て

飼て虫屋に声のさまゝ

夫
住なれし本の野原や慕ふらん
かひて虫屋に声の侘れば

愛はやしつゝしり諷ふ月の友

暖酒のゑひ過しほど

悔るにも無礼の罪はあやなしや

引籠るより断し交り

花にさへ格子参らぬ春淋し

霞むおもひに暮る土殿

にび色の袖は氷のとけがたみ

古きかごとはいかに空蟬

三

送るこそ忘れぬ中の扇なれ

月もや形見虫明の波

鹿のねに覚る都の夢の跡

後鳥羽御集

月影に虫上の瀬門を漕出れば
八十嶋かけて送る鹿の音

狭衣

夫

旅人のみの吹返す朝あらしに
村雨むかひ行なづみぬる

新六

さまほしみ世の憂時の隠蓑
なにかは山の奥もゆかしき

夫

般若台に納置てし法花経も
夢殿よりぞ現にはみし

栄花
馬子大臣の事

続古詞書

亀山の仙洞に吉野山の桜を
あまたうつつしうへ

夫

雉子なく春の裾野のむらしばに
又声やどすも、ちどり哉

拾

春の野にはるくみれどなかりけり
よに所せき人のためには

夜寒いとはやしる旅の宿

時雨にぞ身を隠蓑着まほし

世離れてとく入ん奥山

法華経を得んでふ心深からじ

うつゝにみしやその般若台

唐土に向ふは大和使にて

吉野、桜引植る時

打羽吹鷲ならし園の中

霧の春野にいざ雉子狩

遅き日に禁めぐりははるけしな

行く堀は所せきまで

ウ

此里は新治の田も幾千町

蒼生のひろごれる末

久堅の天が下しる星の影

それと万却の石は川影

夫

おほぞらに河辺の石は上りつ、
星となる共君は忘れじ

拾

ごうつくす御手洗川の亀なれば
法の浮木にあはぬなりけり

浮木にぞ汀の亀も逢つらむ

入て仏の道やたふとぶ

夫

夜をこめて朝政ひきかへて
今は仏の道ぞ行ふ

月にその朝政よそにして

女の色に猶まよふ秋

長恨歌

し賀寺上人

冷じき思ひを人は志賀の山

古

むすぶ手の雫ににぐる山の井の
あかでも人にわかれぬるかな

あかで別れは哀言の葉

散を唯惜みて花の圓居しつ

源若な

名

長閑かならぬは弓の箭風よ

戦ひの場は霞もみだるらし

巻くいとむ絵は右左

さまざまに尽す舞の手目もあやに

山の帝ミカドの御出近しも

しつらひもかやく屏風幾牧ぞ

柏梨の夜も竹のともし火

鐘冴る庭に上人名乗して

杏すり行や今朝の初雪

別れぬる跡は袖の香消返り

鏡に君が影もとまらず

源すま

別ても影だにとまる物ならば
鏡を見てもなくさみなまし

ぬれ影に月も涙や誘ふらむ

春日まばゆきうた、ねの床

かゝふ耀哥ぞ露も身に入

拾
たらちめの親の諫しうた、ねは
物思ふ時のわざにぞ有ける

いさめをも思ふ学の窗の中

万長哥

かゝうかゝいに他妻にわれも
通はん我妻に他もこと、へ
此山を牛はく神のむかしより下畧

霧のごと牛掃神もなびくらし

秘る調べもことに伝へつ

麻と散かふ蠅いとへり

夫

古へのさばへなしける神だにも
けふの御禊になびくとぞさく

祓する川せは波もなえかれよ

同

御禊する河の淵瀬にひく網を
大麻なりと人やみるらん

引網人は暮過るまで

ウ

いとまなき小船の綱の苦しげに

市路は運ぶ年木多しも

山本の雪吹しみ、に破れ笠

夫

あかざりし花のふぎきに好なれて
雪の比にもしがの山ごえ

好なれし花は余波まではた

最媚ける桜の直衣脱すべし

第八菊

何瓶

濱清み菊や砂のこがね花

鶴たてる江は薄き露霜

鶴の翅しほるは朝霧に

太山隠れの月かすかなり

打音も里のきぬたの間遠にて

分残す野は嵐吹末

明日や又散道替て桜符

鐘麗なる松陰のくれ

ウ
筏おろす川辺は春も流るらし

氷われつゝ増る水上

こぼちつる網代は跡も波早み

報悲しと罪悔る人

頼むこそあまねき弥陀の誓なれ

艸葉に月の鼠浅まし

虎の住野原にさはぐ秋の風

他妻とねん夕べ身に入

恋渡る思ひあやぶむ梯に

雲井にみしは忝き袖

物の音を天稚御子や愛けらし

星のけはひもたゞならぬ空

夫

鶴のゐる汀の菊にしら浪の
をれどつきせぬ陰ぞみえける

同

雲るなる鶴と見しかど鶴の
はしの頼りに通ふなりけり

同

鶴の峯飛こえて鳴ゆけば
太山隠るゝ月かとぞみる

同

太山ふく秋風寒み東屋の
しづはた衣今ぞうつなる

夫

後の世に弥陀の利生をかぶらずは
あな浅ましの月の鼠や

増かゞみ

虎とのみ用られしは昔にて
今は鼠のあなう世の中

六帖

他妻は杜か社かからくこの
虎ふす野べかねて心みん

後撰

ひと妻に心あやなく梯の
あやうき物は恋にぞ有ける

狭衣

うつほ

夫

冴る夜の影みる星の林より
霜吹下す木枯のかぜ

同

池水の花の林に来てみれば
ふるきによらずあせにける哉

万

池上の力士舞かとしら驚の
ほこひ持て飛渡るらん

二

白鷺の霞まぬ影や力士舞

古ぬる門は法説し跡

霊山の釈迦の光は今日の月

露の契も朽す逢時

瑠璃君を思ひ秋なき中舎

起出ん余波絶ぬ朝白

引かけし裳さへ紫苑の色めかし

仕ふる袖のならず百敷

かしこきかのぼるは高き位にて

拾

霊山の釈迦の御本に契りてし
真如朽せず相みつるかな

源玉葛

るり色に咲る朝白露置て
はかなきほどぞ思ひしらる、

源夕顔

舞の事

拾愚

歴山の裾野の小田の秋風や
なびきし人の初なるらん

春雨

我妻と頼めしか共鹿杖の
葉薦になりぬ袋たべ君

とのる物袋事

田返しつゝも分るれき山

なべて世は春風靡く道の末

土産にや誰も折れる鹿杖

袋かも霞のつゝ、む露の玉

涙しぼるはうき宿衣トノキセウ

ウ

通路をゆるさぬ関は月守て

立名冷じ浅き河口

思ひたゞ雲井の雁にをとらめや

拌まん塔は峯にはるけし

雪埋む山辺もこよふ翁さび

年の急きはさぞな炭売

夫

み渡せば遠山寺の塔の上に
降重ねたる九のわたの雪

雁塔の事

拾

双六の市ばにたてる他妻の
あはでやみなん物にやはあらぬ

暮る迄市場に声のとよむらし

笑まけつ、もいどむ双六

おさなげにしばしすさびし難遊

思ひわりなく親かるは何

夜をまたぬかりねは琴を枕にて

世こもるさまは床し蓬生

崩れぬる築地をかこふ花の色

とがむる犬の声霞む暮

盗を守るに心長閑めずよ

月も弓はる此立田山

禁行袖符鞍の得物あれな

拾
盗の立田の山に入りけん
同じかさしの名にやけがれん

三

新六

崩れそふ破れ築地の犬走
ふまへ所もなき我身かな

春雨抄

茹てほす胸やの□のみさ山に
いまはやぶさやさだか成らん

三

尾花吹ほやのめぐりの一村に
しばし里ある秋のみさ山

作れる胸屋は絶ぬ神わざ

磯はふは遷せし里の一村に

植て春まつ桑の幾本

語より心あやなき西忘れ

つれなくて身を忍ぶひえ辻

玉の緒の堪しもうしと捨し世に

西願ひつ、唱ふ六の字

入日さす方に精舎や問なまし

霞は竹の奥晴る比

吹東風に鶴の声誘ひ来て

因可の池にそ、ぐ春雨

いかるがよるかの池と云り

ウ

打乱れ波の間に〜浮蓐

万

いその浦につれ呼来鳴驚鶯
のをしきあが身は君がまに〜

山家
声せずは色こくなくと思はまし
柳のめはむひはのむら鳥

つれをし呼て水遊せり

童べは硯なづそふ手習に

読言の葉のいとも怪しき

帰去采賦

名

司をもとけつ、人は帰りに去

源床夏

嬾は其形さへをとり腹

陶朱公

釣する船もさすや湖

狭衣

後見たちしさかしらは何

西湖の心

さにつらふ倂うかぶ雨の中

真ほならぬいらへいとゞも覚束な

万長哥

さにつらふ君が御事と玉章の
使をこねば思ひやむ下畧

玉章絶て思ひ病ほど

漕のく舟は波の遠方

夫
言の葉を是にならひてちらすなよ
玉章つくるはじの一えだ

包みかね涙さへちる櫺紅葉

汐満る沖にいかれる魚有て

同
散ぬべき櫺の立えの紅葉ぐに
もずの尾ふりのしたり白なる

霧の何国ぞ鴟の艸莖

磯山嵐音たかき暮

夫
かりにゆふ枝折も雪に埋れて
尋ねぞわぶる鴟の草ぐき

月遅き枝折の奥はたど〜し

打散て月も曇らす花の本

同
旅衣曉露にそでぬれて
幾しをりしつしらぬ山路に

行つかれぬる旅はうき秋

夫

たはれおが声もふけ行竹河の
水むまやには影もとまらず

今朝声牙て諷ふ竹河

万

竹河の橋の爪なる花園に
我をばはなてめざし加へて

花園は女曹司加へて分迷ひ

尋ねてつまん齋ともしき

夫

しのはらやさの、く、立有にて
旅行人をしるとゝめばや

鳥の骨肴に霞酪添て

催馬楽

大君来ませ聲にせん御さかなは
なによけん

来ませし君をもてはやす詩

ウ

嬋娟を恥かゞやかで三日の夜に

源葵

香合の筥や思ひこめけん

家集

伊勢御より七条殿へ送りとる
哥の詞がき

送りぬる梅はふくみし冬の色

万

む月立春の来らばかくしてぞ
梅を折つ、たのしきをつめ

たのしきをつむ春近隣

なやらふの声明果る杉障子

夫

君が代の千世に千世そふ御禊して
二度すめる賀茂の川水

都の内はしげき交か

人こぞる豊の御祓の比ならし

一度澄や千代を水影

第九水

一字露頭

川風やむすば、れ行朝水

網代よるく木の葉積れり

圓居する丈夫の袖月冴て

余波も夏の雨過る門

呉竹は茂るをまゝの軒深み

煙かすかに芦火燒暮

旅衣春の山路の末分て

百さへづりの鳥はむかつを

日の影も果て野際あた、かに

船横たはる水の浅沢

夫
菅原の苜田の原にかひ散て
いなつき蟹も世をわたるかな

松のひゞきも暮深き陰

夫
小車の道の小野松早ともせ
わだちも見えず日は暮にけり

おさなきしるべうしろめたしや

同夢浮橋

身を替て棲はいかに小野、奥

伊物

雪踏分てとふ竹の園

千代うたふ鶯の声春近み

夫

何となく治れる世ぞ聞えける
はかなくすさぶ山人のうた

治る時にあふや山人

四皓の心

咲花に老も隠れん宮仕

百敷の花笠さしつれば
天が下こそうしろやすけれ

梅をかざしにさすつばみ笠

夫

武士の八十氏人のまどゐして
浪にいざよふせゝのあじろ木
賤の男がふけ行やみの門すゝみ
このもしからぬまどゐ也けり

詞花

芦火燒山の住家は世中を
あくがれ出る門出也けり

野渡無人舟自横

ウ

夫

旅人の同じ道にや出つらん
笠打きたる有明の月

二

伴へる影も有明おぼろにて

古

有明のつれなく見えし別より
暁ばかりうき物はなし

つれなき別うき道の空

源須磨

君が住あたり遠くも想像

夫

光さす玉崎川の月清み
乙女の哀袖さへぞてる

釣する袖を見しや玉嶋

神功皇后

戦もかち得ん日をぞ松浦潟

いさむ船出や水主の声く

左遷もゆるされて今帰るらし

源水串

給ふ司ぞ数の外なる

分てしも撰ぶを哥の誉にて

梨壺五歌仙

賢き跡はふりぬ梨壺

梨壺や君葉の花も降雪の
身の代衣朝風ぞふく

着るや今日みのしろ衣雪重み

狭衣

紫の身代表それならば
乙女の袖にまさりこそせめ

月にも笛の録おもだ、し

思ふ事櫃におさめて秋はいぬ

恋のやつこのせめぐ冷じ

万

家に有し櫃に鍵さし納てし
恋のやつこのつかみかゝりて

夕されば豊はた雲をさしかけて
恋のやつこをせめきつるかな

ウ

哀そふ豊旛雲の夕詠

夫

色々の雲のはたてをかざりにて
入日やみだの光なるらん

仏のかざり日さへかゝやく

たゞしきは又上もなき獅子の座に

獅子狗の事

さらで御帳に近きこまいぬ

皇も久に経ん代の栄へにて

金の花もひらく此時

万

すべろぎの御代栄んと東なる
みちのく山に金花さく

夫
しろがねと金の花に咲まがふ
玉の台の花にぞありける

菊の香に玉の台は冬も不知

露もえならぬ舞の幾折

憂人を相撲のせちにおもひそめ

泪あらはに螢飛秋

うすもの、袖照通る月の色

産屋に神の昔したへり

弥増に氏広ごらむ花の春

霞をかけて深き源

三

うら、なり風も動かぬ八幡山

鳩鳴ゆふべ雨ぐもりせり

香のかは法華三味の堂ならし

今一度と無をとふ道

罪得しは出ん都の別しれ

夫

豊みきの聖を誰もかたぶけて
しるをつみえぬ人はあらしな

聖の酒も酪権が本

客人は月もおかしき宿に来て

律の緒琴は思ひ引声

万

夢に見えたる哥
いかにあらん目の時にかも声しらん
人のひざのへ我枕せん

覚て今日そごろ寒けし夢の跡

春雨

世の中は鰐一口も恐ろしや
夢にさめよと思ふばかりぞ

遁れぬる世はたゞ鰐の口

山家

いそなつみ波懸られて過にけり
わにの住ける大磯のねを

磯菜をも摘身は蟹のたぐひにて

古今

こゆるぎの磯立ならし磯なつむ
めざしぬらすな沖にをれ浪

波立春やめざしぬらさん

岩が根の雫落そふ雪消に

外山に蒔はあはれいとなみ

万

千早振神の社しなかりせば
春日の野べにあはまかましを

春日野に崇て社定むらし

ウ

源夕顔

栄花

後撰詞書あり

古郷の佐保の川水けふも猶
かくてあふせはうれしかりけり

佐保の手向も絶ぬ大麻

行道のたより嬉しき逢瀬ぞよ

夫
此ほどは伊勢にしろ人音づれて
たより嬉しき花かうじかな

かくる思ひの色花柑子

病より起てめづらし床の月

袖冷かによるは脇息

引ならず数珠は露さへ貫とめて

菩提の種やこの女郎花

統古今
数珠を女郎花に付てふせにかすとて
名にめでさかの秋のおみなへし
是もほだいの種としらずや
夫
あかだなの花の枯葉も打しめり
朝ぎり深し峯の山寺

阿加棚に觸る夕風からがろし

住谷の戸に遠き川音

木兔はむべ□なる山トて

楢の葉柏雲埋む色

新六
山風に楢の葉柏をと高し
すむみ、づくも聞やおどろく

白妙に森の木間なき花盛

木綿打まがふ春雨の露

名

瑞籬や東風吹越る朝ぼらけ

ひまみせけりな沼の薄氷

萌出てそれと芦辺を莞艸

立たつかげは千鳥諸声

月更ぬ程に妹許急ぐらむ

身に入思ひ親に申な

独寝は露の昼間の袖枕

風待とりてあけし半葩

暑き日をさふるは庭の木陰にて

夫木

夏の日にもゆる我身の侘しさに
水乞鳥のねをのみぞなく

水乞鳥のよる石井筒

夫

山里は谷の笥のたえくゝに
水乞鳥の声聞ゆなり

笥さへ朽て山田のかたあらし

同

山本の竹の笥をもる水の
わりなき世にもすみ渡る哉

落葉も霜も深き村竹

同

松かげの岩のたむけにすくいする
鶴の落ばに御代を知らない

雛をしも育みつるは巢に入て

もる官人も絶て暮る夜

貫之家集

かき曇りあやめもしらぬ大空に
ありとほしをば思ふべしやは

心あてにありとほしをや仰ぐらん

夫 星の哥詞あり

我やどの薨になのる人やたれ
たしかに名のれ何のくさ共

薨の軒端めぐる浮雲

雨になる寺は鼓も音無て

夫

高雄山哀なりける勤かな
やすらひ花と鼓打也

休らひ花の折過し陰

惜まるゝ弥生いとはや尽けらし

やすらひ花は弥生比也

野べは霞の色も残らず

新六

夜は来て明る悲しき箱鳥は
いつ浦嶋にかよひ初けん

積る齡やしらむ浦嶋

箱鳥の帰る遠山明はて、

第十雪

何船

五社百首俊成脚

けふ毎に幾年なみを過ぬらん
つもりの浦の濱松のきし

夫

住吉と思はん人の為なれや
岸に敷てふ苔のさむしろ

新古

吉野なるなつみの川の川淀に
鴨ぞなくなる山かけにして

年なみの積るしるしや峯の雪

氷かさねて敷苔むしろ

芦鴨の床や岩ねにトつらむ

暮る山陰風しづかなり

雲帰る尾上に月はいざよひて

それとばかりは空遠き声

木の間より森は桜の初紅葉

袖そぼち行露の下道

ウ
早川や棹取くゝにわたし船

夫

山河のせむの井杭を打そへて
はやくも水をせき落す哉

井杭に水の音もよどまず

鮎走る波に鵜繩や乱るらん

蓑吹風やわびん賤の男

檜葉を折は春待まふけにて

霜帯松は冬籠る山

此朝け垣ねに馴る火烧鳥

秋も果行九重のうち

月の色も坪前栽の移ひて

稀に宿直は央過る袖

嬾は泪おち髪さはらかに

なやめる形恥るおとろへ

夫

百敷スミカに栖定めよ火烧鳥
なれが舎りも庭に見ゆめり

源総角

天人の五衰

天人の擗双の花の香はあせて

うつほ楼の下

認来し琴の声も高樓

立舞しその春は此日か

同上

育める心ことさら愛真子

菅原翁の事

二

菅原や伏見は霞む暮淋し

源乙女

引別れなんおもひ大宮

夫

菅原や伏見の里のあれ枕
ゆふかひもなき草の霜よ

かりよる程も野はあれ枕

簾には菖蒲やさしくさし添て
ひたちのま弓けふや引らん

見初しを忍ぶ馬場の帰さにて

夫

浅茅原古きそとばに契おかん
となりとならば哀とはみよ

霜かけて浅芽をしなべ裏枯ぬ

新六

けふかくるたもの花の色にてぞ
五月の玉も光ぞへつ、

ウ

玉かとも袖に五月の影清み

拾玉

鶯の山退凡下乗のそとばまで
跡ある跡をみるぞうれしき

月になる空に仰ぐはわしの山

壬二

わしの山法を木葉にかき置て
花のひもとく鹿のそのかな

爰に遷すやその鹿の園

俊成卿家集

聞初し鹿の園にはことかへて
色々になる四方の紅葉、

散とちる紅葉を渡る風早み

もしほ

しやこと云鳥の上毛の紅めに
ちりし紅葉の残る也けり

時雨る、道に鷓胡の飛かふ

只今惟有鷓胡飛

往昔の跡はとへるも哀にて

少将意光の事

松のあらしの花を吹跡

夫

桜たい花の名なれば青柳の
糸を垂てや人の釣けん

夫

蟹人や鯛釣らしも鳴見がた
沖つ浪間に袖かへるみゆ

佐用姫の事

我恋は千引の石を七ばかり
首にかけたる神のもろぶし

万

人ならば親のまなこそ朝もよひ
紀の川つらの妹と背の山

夫

引とめん方こそなけれ行年の
きの関守が弓ならなくに

三

万

波羅門が作れる小田をはむ鳥
まなぶたはれてはたほこにける

桜鯛よる磯波に見へかくれ

夕べおほろに行沖つ船

石となる身は思ひにや堪ざらむ

あへんはかたき神の諸臥

山にさへ妹背てふ名の羨まれ

紀の関守がこふる白鳥

雪の中も冬の日数のとゞまらで

寒さきはめし風たゆみけり

波羅門が小田作るべき比なれや

分る、陌しるき旗鉾

新六

高山の峯に旗鉾我立て
みがける玉は世の人のため

夫

顕はる、時こそ有けれ三代迄は
石とて過し其唐玉も

□□□

夫

うたがひし宮守の跡はそれながら
人の心のあせにけるかな

夫

宮守住山下水の秋の色は
結ぶ手に付印なりけり

夫

比えの山豎義や近く成ぬらん
よはにさへたる問答の声

みがくより玉は光や顕はれん

時を得ぬ身の歎三代迄

松の戸は月にも速く閉果て

とはれぬ閨ぞ恨ながき夜

露とだに宮守のしるし消ね唯

結ぶかけさへ浅き山水

思ふこそ法の流の末ならめ

堅義絶せぬ問答の声

□けつ、灯常に照すらし

怠らで読文のまきく

賢きは高き位もかたからで

道ある世をもしる萬民

ウ

さらせるは奉ん御調の布ならし

山家集

紅葉よるあじろの布の色とめて
ひを、くるとは見ゆる也けり

夕波かくる瀬くゝの網代木

源橋ひめ

河影の住居とひ行月のもと

霧の絶間も床し垣間見

忍ばるゝ姿よそへん女郎花

堀後

女郎花めでたき花のすがたかな
そとをりひめもかくや有けん

衣通姫やおもふいにしへ

夫

詠めけん蜘蛛のふるまひ空晴て
月さやかなる玉つしまひめ

笹蟹の糸乱れずも引渡し

同

軒ばより籬の竹にかたかけて
風をかぎりのさゝがにの糸

戦ぎしづまる庭の呉竹

雨になる外面の野べは暮果て

夫

前の野に雨そほ降て木隠の
塚やに立る鬼のしこ草

鬼の住てふ塚屋恐ろし

名

戦ひの跡は行かふ道をなみ

汐干の余波波ひたゝけき

花陰に拾へど貝もうちよせて

声長閑かなり若の浦松

住吉や行幸はへある春ぞ今

千年動かじ立宮柱

もしほ

造る共又もやきなん菅原や
むねの板間のあはん限りは

君が代にあふこそ棟の板間なれ

涙かゝらじ二人ぬる床

七夕に借はたぐへん恋衣

まてと晴にし月や媒

夫

またれつる月の媒いらぬまに
早舟出せよ天の渡瀬に

旅なるを思ふ雲井に秋の風

秋來見月多囑思
自起開籠放白鷗

籠に飼置も今放鳥

尊きは道に入ぬる心ばへ

尽せぬ種や蒔し耶輸多羅

やしゆだらが福地の園に種まきて
あはん必うるの都に

とはにしも有為の都は花や見ん

霞まぬひかりさすや西山

船誘ふ真東風は池の中嶋に

及第の試の心

うらゝに独詩をうたふ声

ウ

主さへとはん友まつ菴の雪

夜深くむかふ宿の埋火

夫

山里は垣ねの梅の匂ひ来て
やがて春なる埋火のもと

咲やこの花数そはる冬の月

そゝきしあまり晴る難波路

蟹の子は藻屑かくとや行帰り

海のおきな住は浪際

浦風も馴てひさしき音にして

巖とならむすえの砂地

餘興

取貝の数や千尋の濱の露

今年明和九といへる弥生末つ

方より、筑波の道なん立帰り

分入こと侍りき。いとめづらし

うはしながら、久しう此道

のこと思ひ絶にしかば、よろづ初く

しうたどらるれど、もとより

好ぬること、て、ひたすらに心入

つるも物狂はしう、ひがごと多

からむとおもふく、水無月の

末には独千句思ひ立侍りて、いと

まのひまごとにおもひつゞけ侍る

ほど、思ひの外にはかくしから

で、やうく文月末の四日といふに、

なんぞの数にたり侍りぬ。古へは

あまた度のせしことなれど、

近き世には無下に打捨たるやう

にて過來にしかば、久しかりつる

と絶もしるく、こたびはことの外

に見苦しう、ふつ、かなりと見る

も冷じけれど、いたくこうじ

にたれば、かたはなる所く取な

せしなどもせず、さながらにて又の

日昔神の御影かけ奉る日とて、

御前に手向つるも、中くおこがま

しう、物めかし出たるさまなるも、

我ながら怪しきまになん。

千艸にはうつさぬ色よ梅紅葉

又住吉のおほん神なん、日比もねん

じ聞ゆることにて、いかでと思ふ心は

浅からねど、法楽などいはんはかた

じけなく、思ひかけ侍らずながら、

第一第十の発句は、そなたさまに

よせある哥をもてつかふまつり

侍りしかば、そなたにもけしき

ばかり手向し侍るとて、

言の葉の千入や恵み

松の露

隆子

(くもおか あずさ・関西学院大学大学院
文学研究科博士課程(後期課程))